私の履歴書

岸 恵子

㉚

フェイドアウト

2018年秋、私が住むパリ・サンルイ島のアパートの2階（一部）が崩落した。築400年の年代物には様々な災難が起こる。我が家は3階にあるが、異常気象で屋根の煙突から豪雨が流れ込んで私の住まいは水浸しになり、今も修復工事が続いている。

崩落事件のさなか、私は2つの目的を持ってパリに着いた。1つ目は私の手違いで大事な一人娘の出生が日本大使館の領事部に記載されずにいること。つまり私の戸籍に娘の存在がないので、迂闊だった自分の失敗を修復してもらうという嘆願。2つ目は一生の大半を過ごしたフランスと日本の今昔物語を私の家族を絡めて映像化すること。

様々な構想を抱いてパリに乗り込んだ私を襲ったのは到着5日後の11月17日に起きた「黄色いベスト運動」だった。マクロン大統領の政策への静かな抗議デモから始まった運動化する能力にたけている。交通手段を絶たれた市民の連帯性もすごい。愚痴も言わず、自転車やローラースケートで仕事場に行く。そして、運動は新型コロナウイルス問題が深刻化するまで続いた。

私は娘に送られて争乱のパリを去った。メトロの駅名が「ピエール・エ・マリー・キュリー」（ノーベル物理学賞受賞のキュリー夫妻に由来）

久しぶりの撮影 私はペケ

デジタルに戸惑い、変化を実感

動の詳細を語るつもりはない。ただ、不特定層が始めた異議申し立てに過激な人々も加わり、運動は革命前夜を思わせる様相に膨らんだ。

私はパリでの年越しも考えていたが、日仏の今昔物語を映像化するというルポ制作を諦めざるを得なくなった。あらゆる交通機関が止まってしまったのだ。動けない。

フランス人は不満を政治運というパリ南郊に住む家族の元へ帰る娘を抱きしめて、私も日本への一歩を踏んだ。

母は東へ、娘は西へ。振り向きながら去ってゆく娘を万感の思いで見送った。

2019年5月1日、令和元年の初日にエッセー集「孤独という道づれ」を出し、同じ年にテレビドラマにも出演した。このドラマは作品も演出も共演者も素晴らしかったが、私自身はペケだった。

久しぶりに撮影に参加し、私は言葉にならない程の驚きを感じた。歴史は変わるという非情な実感だった。

女優になったのははるか昔。フィルムが高価な時代で演出家はあらかじめカット割りを作っていた。同じ芝居を多角面からダブって撮るという贅沢はほとんどなかった。

何度でも消せるデジタルに変わった今、同じシーンを3台のカメラで何度も撮る方式に私は参った。そして、この世界から完全にフェイドアウトしている自分を悟った。

「老兵は死なず、ただ消え去るのみ」という有名な言葉がふと頭に浮かんだ。消え去る前に残しておこうかと思ってお引き受けした「私の履歴書」。この1カ月、読んでくださった方々に感謝したい。

5月というのは私に尊い出会いと別れをもたらした月である。日本から去り、夫から去ったのもスズラン祭りの5月1日。今年のその日、娘が自宅に咲くスズランの写真をメールで送ってくれた。パソコン画面に朝露をまとったスズランの花の群れが咲いた。

「ママンのすてきな5月1日のために庭先のスズランを」と娘の一言があった。

（女優）

＝おわり

日本とフランスの今昔物語を映像化する構想も温めているという＝中西裕人氏撮影

あすから囲碁棋士、名誉棋聖 小林光一氏

掲載日 2020年5月31日 日本経済新聞 朝刊 28ページ ©日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。